



源兵衛川

ゆうすい

ゆうすい

三島ゆうすい会10周年記念誌

2001.9.29

三島町奈良橋回想

大岡 信

掘抜き井戸が 狭い小さい庭にあった。
若荷がちよぼちよぼ生えていた。

塀ぎわに白萩の これはりっぱな 群生もあった。
ほんとにちっこい借家だった、恥づかしいほど。

だが 何てったって あの透き徹る
冷たい清水。天の甘露かんろよ 地の玉露ぎよくろ。

なまぬるい水道水は引いてなかった。そのかわり
縄で吊した西瓜が、真赤に冷えて滴った。

親世流の謡いをうなっていた父ちゃんも、
暗いうちからお釜をしゃかしゃか炊いでくれた
母ちゃんも、この水が誇りだった。

夢の中でも 伸びた藻草がゆらゆら揺れて、
坊やはやがて この奥の水の都へ帰ってくるのさ、
ゆらゆらと頬笑んで 手招きしていた。



輝

発足～フォーラム

平成3年9月28日の設立総会から10年の間、多くの勉強会やフォーラムなどを行ってきました。



▲平成3年10月1日「三島ゆうすい会」設立にあたり大岡信先生を迎えて共同記者会見



▲平成7年11月18日「変わりゆく富士山・いきもの・水・自然」



▲平成7年7月22日「心のふるさと富士山を守ろうシンポジウム」



▲平成13年6月2日「富士山井戸端フォーラム」

NPO法人グラウンドワーク三島への参加

グラウンドワークとは、市民、企業、行政と一緒にパートナーシップをとり、地域の環境を改善していく活動。イギリスで始まったこの手法を、三島では市民内発型として、平成4年に取り入れ、そのリーダー的団体として他の7つの市民団体とともにいち早く加わったのが「三島ゆうすい会」です。

平成11年にNPO法人となったグラウンドワーク三島は、市内各所で身近な環境改善を行ってきました。その多くは、富士山からの湧水を中心とした水辺自然環境を考える活動であることから、「三島ゆうすい会」の活動との接点が多くありました。現在ではグラウンドワークに18団体が参加し、それぞれの環境活動を通じ、お互いに協力し合っています。

第二回日本水大賞 表彰式及び受賞活動の発表会



◀平成12年6月20日
第2回日本水大賞
「環境庁長官賞表彰式で環境庁長官より表彰状を受け取る緒明實名誉会長

受賞

地道な活動が認められ数々の賞を受賞しました。



▲平成9年1月27日
第10回地域文化活動賞表彰



▲平成7年3月22日
第1回NHK静岡あけぼの賞受賞



◀平成12年5月27日
富士山環境保全
支援プラン助成金授受

「三島ゆうすい会」10周年記念 特別インタビュー

ゲスト 詩人 大岡 信 氏
(三島ゆうすい会名誉顧問)

聞き手 三島ゆうすい会 副会長
渡辺 豊博



東京都新宿区「海燕亭」にて、都心の風景を眺めながらインタビュー (2001.7.27)

三島の活動は、だんトツに目立つよ。

渡辺 こんにちは。先生、本日は、お忙しいところ、お時間とっていただきましてありがとうございます。三島ゆうすい会も、おかげさまで10周年を迎えることができました。

大岡 三島の活動は、他のところに比べてだんトツに目立つよ。並の感じでやっていたら広がらないものね。

渡辺 源兵衛川は、今では、三島のちょっとした顔になったかなと思います。三島ゆうすい会は、発起人会に始まり、緩やかなカーブを描くように活動を続けてきました。

大岡 そうだね。日本のこのような活動は、とかく赤か黒かはっきりさせたがるようだけど、向こう側にいる人も、こちらにいる人も、一緒にやれるようだといいいね。

目標を掲げることができる奴は、すごい。

渡辺 昔、先生に言われた2つのことが忘れられま

せん。1つは「頭を使ってちゃんとやれ」。もう1つは「広い視野で、行政や企業ともうまくつき合ってやれ」です。最近、少しはその方向での恰好ができてきたかなと思います。

大岡 日本人だけとは限らないけれど、日本人のしかも男の1番大きな心理的特徴は、やきもち。身内ほど怖いよ。一生懸命やろうと思ってやっても、誰もいなくなっちゃったりしてね。

渡辺 他の団体を見ていたりするとよく分かりますよ。三島ゆうすい会の場合は、些末な話としてはあるかもしれないけど、全体としては、酒を飲んで洗い流しているというか、フアジーでいい加減っていうところでもっているのかなと思います。

大岡 そうだよ。最終的には、絶対に到達できない目標、それがあればよい。でないと、お互いが目標になってしまうから。お互いを目標にしたときの日本人のエネルギーの出し方は、すごいね。いい意味でもわるい意味でも。



ゲストの大岡信氏

人生に張りのある人

渡辺 先生、私も真っ先に読ませてもらっていますが、朝日新聞の「折々のうた」、あの文章の終わり方って、どうして完璧に最後まで使ってぶつっとマル1個で終われるんですか。見事ですな。

大岡 (笑い) 大体、最後の1行の真ん中あたりが

特に言いたいところで、読者が、それを読んで、今日は気持ち良く過ごせると思ったら最高。今 180 字で書いているんだけど、170 字までは大体書いて、あとの 10 字をどういうふうにやって終わろうかと考えますね。これを失敗すると、3 時間はかかってしまう。だからたいそう気を使う。20 年以上もやっているからさ、もう古狸みたい。普通のことで、驚かないよ。

渡辺 (笑い) 古狸か。そう言えば緒明さん (三島ゆうすい会名誉会長) は、楽寿園に地続きのあの庭で、狸の親子を飼っているんです。飼っているというより狸の方が慣れてしまって、楽寿園の森から緒明邸にやって来るという方がぴったりかな。緒明さんは、その狸たちを可愛がっているんですが、三島ゆうすい会もこの 10 年、私も含めて緒明さんにお世話になっています。



聞き手の渡辺豊博さん

大岡 緒明さんも、豊博くんたちの活動があつてこそ、寿命を延ばしているのかもしれないね。

渡辺 緒明さんは、とにかく元気だし、頭も冴えているしそれに、企業人です。3 カ月に一度ぐらい、会計を含めて事業内容をいろいろ見ていただいています。判断と指摘が的確で、具体的な行動が速いですね。「ジャンボ (渡辺豊博さんの愛称) ね、この減価償却の仕方、違っているぞ」なんて言われまして、ドキッとします。

大岡 なるほど。だからこそ頭がしっかりしているんだな。あの人はね、特別にピュアで、人間的にもいいね。男ってね、役割を外されたらうまくもないもんだよ。

渡辺 緒明さんは人生後半から輝きだしたって言うか、我々とばかりじゃないですが地域活動にも参加して、今流で言う「理想の男」の生き方をしているんじゃないかなって思います。声も大きいし、元気だし。

大岡 緒明さんは、人生に張りのある人だね。

目標が決まると、だんだん純粹になる。

渡辺 我々も、市民運動として自戒しなくちゃいけないでしょうが、始めの純粹な思いやポリシーが、だんだんと希薄化することがないようにしたいと思います。創造的な要素も含めて、いかに伝達していくかですね。先生は、三島で思い出される宝物や原風景と言ったら、どんなことですか。

大岡 僕は、家に閉じこもって出歩かない少年だった。父 (歌人・大岡博氏) も物書きで朝から晩まで家にいて、「外に行け」とは言わなかった。そういう意味では、何も無いんだけど、1 番好きだった場所は、奈良橋、今の佐野美術館の近く、南小の近くに住んでいたの、このあたりには、しょっちゅう遊びに行っていた。川の釣りや凧あげ、模型飛行機。作るのはうまかったよ。近所に福場さんというお宅があつて、2 級くらい下のふっくらしたお嬢さんのことを何か書いたんだね。「まこちゃん (大岡信氏の愛称) が書いてくれた」と、喜んでくれたそうだ。小学校のころの女の子の思い出は、それくらいかな。同級生で 2~3 人好きな子もいたけど。(笑い)

渡辺 私も、南中でしたから、かわいい子がいてね、私のことを言うことはないですね。(笑い) 三島ゆうすい会は、10 年を迎えましたが、基本的には、楽しく、仲よくやっていければなあと思うんです。塚田冷子さん (三島ゆうすい会会長) が、こだわってやってくれているんです。どうですか? ああいう、しつこい女性 (笑い) と言うか、純粹な女性は。

大岡 いや、女の方は、だんだん純粹になるんだね。目標が決まらなないと、純粹にはなれないんだけど、目標が決まると、心持ちからしてだんだん純粹になるんだよ。

ゴミを拾う仕組みが、ちょっと浸透してきた

渡辺 そうなんですか。分かりました。先生、今年、「三島市民サロン」の人たちが回顧写真展をやりましたが、その会場で久しぶりに、映画「わが街三島」をゆっくり見ました。先生のお若いこと。(笑い)

大岡 「ここで池に手を突っ込んでください」とか。「子供といっしょに突っ込んでください」とか。そこだけのために担がれたんだ。(笑い)

渡辺 先生、楽寿園の乾いた溶岩の上で、子供たちにいろいろお話されてましたね。サブタイトルは「1977 年の証言」ですから 24 年前です。先生の出ているこの映画、確か 50 本ほどダビングして、市内全小中学校 21 校に配りました。

大岡 ほほう、そうなんだ。あの子たちはどうしているかな。もう、30代の後半だね。いい奥さんになっているだろうね。

渡辺 いい旦那…(笑い)旦那の方は、疲れているかもしれないけど。でも、非常に残念ながら、あの1977年の状況と、今の状況と比較して、水辺の状況がものすごく好転したということでもないんです。ただ、やや、源兵衛川のような拠点ができたかなというところですよ。

大岡 それは、そうだろうね。

渡辺 最近、源兵衛川っていうわけじゃないんですけど、三島も、結構、街がきれいになってきました。まだまだ完全じゃないけど、やっぱり、三島ゆうすい会が中心になってやってきた川掃除やゴミを拾う仕組みが、ちょっとですけど、浸透してきたのかなって思っています。

大岡 そりゃあ、きっと、そうだよ。

信用度の高い先輩たちの活動が、市民運動の担保

渡辺 僕は、先生や中川さん(三島ゆうすい会顧問の中川和郎氏)たちの文学的メッセージは、第1段階の市民運動だととらえています。時代の流れを止めるための第1歩だった。その後の第2次の動きは、信用度の高い先輩たちの活動が市民運動の担保となって、普通だったら時間と手間がもっとかかっていただろう活動を、見事にジャンプさせてくれました。三島ゆうすい会も含めたグラウンドワーク三島への視察者が、年間2,000人くらいです。「我々の目指した、市民と企業・行政とのパートナーシップ…」と、まるで呪文のようにしゃべっていますが、この視察、評価されてすごいんです。

大岡 ははあ、ふうん。そりゃ大変な数の視察だね。それで、視察に来た人たちは、地元へ帰って何かやっているの？

渡辺 大体、私の感覚で1割かな。その中で、ちゃんとやるのは、5%ぐらい。でも、三島のノウハウを学んでいってます。新潟県豊栄市のように何十回も来たところもあります。大阪、山形、埼玉等、熱心なところは、他にもあります。三島は、まちづくり・環境づくりの市民内発型の新たな運動スタイルや手法を全国に発信・伝達し始めているのかなと思います。

大岡 みんなが変えていったんだね。

負のインパクトの方が、人間を奮い立たせる

渡辺 三島の人間は、いいですよ。質が高いっていうか。日本全国で、市民団体は、86,000団体あるんです。そのうち静岡県は3,934団体で、全国7位です。更に、三島市には、数百団体あって、多分、静岡県内で1番です。

大岡 そりゃあ立派なものだね。

渡辺 何だか、負のインパクトの方が、人間を奮い立たせるような気がします。行政は、絶対「負のメッセージ」を送りません。例えば、「富士山、糞まみれ」みたいなことは言いません。それを、僕らは言っちゃうんです。そうすると、反応を返してくれる人



が多いんです。「三島ゆうすい会」の活動の原点みたいなところも、「負のメッセージ」でスタートしていて、そこに知恵が集まってきて、大きな動きになってきたんじゃないかなと思います。

大岡 うん、そうだね。それは本当にでっかい仕事をしているんだよね。

民度が違うって感じ

渡辺 僕たちは、富士山も、何とか守っていけるようなルール作りをしたいと思っているんです。

大岡 本当にそう。まあ、俺はさ、無茶苦茶なことは言わない方がいいんだけど、言ってしまえばさ、富士山の何合目かに、車の乗り入れを許可したことが、非常なマイナスだと思うよ。利害はあるだろうけれど、絶対よくない。いいことないと思うよ。富士山は、もともと触るべき山じゃなかったんだよ。土足や四輪駆動で行くような山じゃないのに、私が生まれたころから、富士山は、だいぶおかしくなってきた。そういう山になっちゃったんだ。今、それ以前のことを、みんな全然分かんなくなっちゃっている。富士山は、もともとそうやって触るべきものじゃなかったんだ。

渡辺 そうですね。具体的に言いますと、富士箱根伊豆国立公園に年間 2,500 万人の人が来ています。世界一の観光地なんですね。それで、富士山 5



合目に、250 万人から 300 万人来るわけでしょう。頂上へは、30 万人、多分今年は 60 万人くらいになるでしょう。天気はいいし、21 世紀の最初ということもあって、今ものすごい人なんです。はっきり言うと、この人間をどうやって排除していくかですね。現実的な問題もありますが。まあ私は、いっぱい人が来ても、ゴミが落ちていない仕組みを作ればいいと思うんですよ。それが理想ですね。

大岡 そりゃあ、そうだな。

渡辺 その理想は、去年もやったんですけども、3,250 人の人に来てもらって、4 回ゴミを拾ってもらったんです。三島からも、ものすごく来てもらいました。そのとき、6 トンのゴミを拾ったんですよ。でも、富士山は 5 合目から上で、年間 70 トンのゴミが捨てられるんです。まあ、その 1 割にも満たなかったわけですね。でも、拾っていると、やっぱり捨てないですね。捨てるにくなるんじゃないですか。

大岡 いくら図々しくても、そりゃあできないだろうね。アメリカの国立公園など、どこに行っても何もゴミが落ちていない。何だか、民度が違うって感じがするな。くやしいけど。

風がいい方向に吹いているような…

渡辺 先生を含めて社会的名士というか、いろいろな人が、発信していますよね。三島がふるさとで、今は離れて住んでいるって人の方が、思いが濃いかもしれませんね。この間も前静岡県副知事の坂本由紀子さんから、「ジャンボちゃんね、中途半端なことをやっていないで、そろそろ国を動かすレベルのことをやんなさい。頑張るのもいいけど、社会的評価も得ているんだし、国を動かさなきゃだめよ。私も手伝うわよ」って言われました。

大岡 そうだよ。彼女は三島の出だから、何か私に言ってくるんじゃないかなって思ったと思うよ。そりゃあ、国も、ちゃんとした民間の優秀な人に会った方が、いいに決まっているよ。

渡辺 三島ゆうすい会のスタートのときもそうでしたが、先生の応援もあったり、風がいい方向に吹いているような気がします。世の中、面白いですよ。先生、富士山に便所を据えて、評価される時代ですから。(笑い)

大岡 便所を据えたから、ついに読売新聞に取り上げられちゃった…(笑い) 豊博君の昨日の記事、読んだよ。全国区だね。(笑い)

渡辺 先生、今度は、朝日新聞の「私の視点」に投稿しました。

大岡 タイトルは？

渡辺 「富士山を救え！NPOの挑戦」「富士山の尿尿問題に挑戦する」です。先生もメッセージを何か送ってくださいよ。昔、毎日新聞に「富士山のアバタとエクボ」で書いていただきました。先生が応援団で書いてくださること、社会的影響力が全然違うんです。それがNPOの信用度です。いろいろな人に応援してもらっていますが、その方々をとおしての信用というのも、とても大事だし、必要だと思うんです。

「爆発せよ。富士山」「出産せよ。富士山」

大岡 僕は前に詩を書いたよ。富士山の詩をね。「産卵せよ富士」という題で、「産卵」とは、「富士山が爆発したらいい」というのね。

渡辺 あっ、それいい。それを書いたんですか？

大岡 そうよ。「破壊がすべてを新たにする/産卵の時 到るべし」というの。(笑い)

渡辺 悲しいようで、だんだん切迫感があるというか、現実味を帯びてきましたね。

大岡 とても気持ちがいいね。(笑い)

渡辺 気持ちがいいって？(笑い) やめてくださいよ。でも、分かんないですね。何が起こるか。

大岡 俺はね、割と近くにやっぱり噴火すると思うね。(笑い)・・・と思ってない？

渡辺 歴史的に見ますとね、今までに 3 回、250 年に 1 回ずつ爆発しているんです。今、307 年目なんです。

大岡 人間の妊娠なら 10 カ月、そう後ろまでもたないものね。出産せよ。富士山・・・

渡辺 でも、東京の朝日マリオンでやっていただい

た先生の富士山へのメッセージ、あれが、ちゃんと生きています。礎になっています。あれがスタートだったんですから。

大岡 そういうことで繋がっていることは、すごい。俺のことはともかくとして。

渡辺 「三島ゆうすい会」然りですけど、ポイントのところ、ここぞというとき、また、メッセージをお願いします。本当に凶々しくて申し訳ございませんが、よろしくをお願いします。我々としては、メッセージを受けてそれをどう具体的に料理するか、まあ、私たちの責任でもありますし、ちゃんとやろうと思っていますが、市民運動は、発展性がないとだめだと思うんです。

大岡 それは、そうだね。

富士山でやることは日本中にぱっと広がる。

大岡 「ここから上は登るな」とか、「何々するな」とかの御禁制が、今の富士山ではできなくなっちゃった。「富士山は、スポーツのために存在している、ちょっと高い山」という考え方があがるが、私は、非常に気に入らない。しょうがなく黙っているしかない。富士山を単なる土の塊としてしか見ない奴が多すぎる。昔は、少なくとも精神的な存在だった。シンボルとしての存在だった。言ってもしょうがないから言わないけれど、腹の底では、「この馬鹿どもは」と思って軽蔑している。そう思っている人は、大勢いると思うよ。今の風潮に対して、軽蔑するという人々を、吸い上げることができれば、すごい運動になると思う。今ね、富士山はいつでも簡単に登れる、タブーは何もない山になってしまった。昔は糞小便をするのも我慢した山だった。富士山は、無形の財産。無形のね。四輪駆動に代表される風潮を許しがたいと思っている人もいるわけだ。

渡辺 先生のメッセージは、すごい。僕らがいくら言ってもだめですが、先生は、三島の人的宝です。社会的影響力は大きいですよ。

大岡 その認識は、間違っているよ。

渡辺 でも、私以外の人たちも言っています。僕は先生に、「質の高い運動をしろ」と言われたことがあります。

大岡 それは、言ったよな。「みっともないことは、しないでほしい」と。

渡辺 それで、どうせやるなら日本一。一番高い所、富士山へ、バイオトイレの設置。酸欠です。二日酔いです。頭ガンガン。でもまた、来週行きます。

大岡 富士山でやることは、すぐに日本中にぱっと広がるね。これが例えば、青森の富士山、岩木山がどんなに頑張っても、「青森の富士山、へえ」くらいだろうね。

「三島から発信したい」というこだわり

渡辺 先生、僕にとって、富士山は「たかが便所されど便所」なんです。でも、便所やゴミ等々、問題は山のようにあるわけです。

大岡 山の上だけが問題じゃないんだよ。私が初めてヨーロッパに行ったところ、40年くらい前のことだけど、「私は日本人です」と言うとな変な動物みたいに見られたね。そのころ、フランス語ができる東洋人の知識階級はベトナム人とカンボジア人だった。

渡辺 へええ。そんな時代ですか。(笑い)

大岡 そういう時代にね、街を歩いていてまず心配だったのは、便所とレストランだよ。気が重かったね。物事の付き合いには段階があるけれど、人々が知らん顔してすましている問題、誰にも聞けないことが、実は、大事。人間は、口から入れて出すことができれば、何の問題もないんだよ。それが途中で詰まったら大変だよ。(笑い)

渡辺 人間のベースですね。人としての循環、思考の循環・・・全部、からまっていますね。

大岡 俺にとって一番大事なのは、一番差し障りのある便所だね。僕が富士山に行っても、最初に「どこにある？」と聞くのは、便所だね。だれでも、うんこ、しょんべんのことを、口にしない分だけ、それは大切だよ。



渡辺 今年、500人も人間の、バイオトイレのための杉チップをしょって、富士山に心意気で登ってくれたんです。応援してくれる新しいパワーを感じました。世の中の潜在力が見えてきた気がします。本当に、ワクワクしてきました。「三島ゆうすい会」をスタートさせてもらって、「何やってんだろうな」

と思われたこともあるでしょうが、先生ね、先生にもお世話になった、東京や大阪でのシンポジウムの継続性などが、ボディブローのように効き始めてきたようです。急に視界が開けてきたみたいですよ。僕は「三島から発信したい」というこだわりがあるんです。先生はおっしゃいました。三島は、水に関わる流域全体と運命共同体だと。水は血液だと。血液を汚す人間は、全部を汚してしまうと。僕はいつも自戒していますよ。よく考えると、流域だけでなく、日本人全体の問題だと思うんです。先生からいただいたメッセージは、まさにバイブルなんです。

大変そうでも、時間の単位で言うと長くない

渡辺 数年前、「富士山を世界遺産に」と、三島でもたくさん署名してもらって、世界遺産の関係者を僕が案内したんです。そのとき連中に言われたんです。「ジャンボちゃん、あなたは何のために生きているの。何のために生きていくの。日本人の言う豊かさって何ですか」という3つ。それが今でも頭の中にあって、くやしくてくやしくてしょうがないんです。あの連中を、今呼んだからと言って、まだ、富士山は大して変わっていないと思うんですが、ただ、少なくとも便所のことや森のことや、何か方向性だけは言えるんです。だから「そういう方向性で始めますよ」とことだけメッセージを送りますよ。今度、富士山は、自然遺産じゃなくて文化遺産でいきたいと思っているんです。

大岡 前は、どうだったの？

渡辺 自然遺産でしたが、これがなかなかいかないんです。本当は、自然遺産と文化遺産と両方でいきたいんですが、大きな目標としておきます。

大岡 自然遺産としてやると無理だろうな。文化遺産なら、富士山は、トップだよ。絶対に。

渡辺 「精神的な意味での富士山」という考えが国民に理解されれば、ゴミは捨てないでしょう。「真摯に戦うアホな勇士」とって読売新聞にも書いてもらったんですが、ぼくは、この真摯って言葉が大好きなんです。三島の多くの人の思いの蓄積がなければ、できないと思うんです。人のこだわりと意思のプロデューサーみたいな仕事をさせてもらっていますが、その厚みみたいなものは、先生や中川さんたち「わが街三島」をやった先代の思いの純粋性、正統性があってこそなんです。三島として、ふるさとの中で間違っていないんだという思いですね。この運動は、地方を越えて、日本を変えていくと思います。政治

家は、今、仕組みを無理遣い変えることに一生懸命だけど、先生のお話のベースは「人の心を変えなさい」というメッセージだと思います。人の心を変える仕事は長いようだけど、一番早いのかもかもしれません。**大岡** どんなことも、中にいる人は、努力して相当尽くしても大変だなと思ったり、どうしてこんなにうまくいかないのかか思ったりするんだけど、時間の単位で言うと案外に長くかかっていないんだよね。

渡辺 「三島ゆうすい会」のみんなが元気というのも、嬉しいことです。

大岡 それはいいね。何よりだね。ところで、僕は都心のマンションを購入しました。子供たちも独立したし、女房が、マンションの片カナ名前の短いのが気に入ってね。私は、モデルルームを案内してくれた女の子の、説明の日本語が気に入って、直感で決めた。まだ、完成は再来年だけど。今の家は二世帯だと何かと広くて、外出するときの戸締りなんかにか時間がかかるし、東京駅から遠くてね。

渡辺 じゃあ、つまり、裾野の別邸にいらっしゃる回数が増えるってわけですね。



大岡 まあ、そういうことになるのかな。このごろ、名簿などの問い合わせを受ける時、「出生地」の項目というとき必ず「静岡」にされるけれど、あれはいやだね。静岡県でもいろいろな市があるんだ。「静岡」と書くなら「静岡県三島市」としてくれと。

渡辺 ああ、よかった。さっき、インタビュー前に、盛んに沼津の図書館のことを誉めていらっしゃって、「ふるさととは？と聞かれたら、三島と答えるか、三島と沼津、もしかしたら沼津と三島と答えるかな」なんておっしゃっていたので心配しましたよ。三島の図書館のことも、誉められるようにしたいものです。本日は、貴重なお話、ありがとうございました。

記録 三島ゆうすい会 運営理事
小松 幸子

ふるさとが誇りとする文人たち

おやこさんだい みしま ぶんがくしゃ
親子三代の三島の文学者

おおおかひろし おおおかまこと おおおかあきら
大岡博・大岡信・大岡玲

かじん おおおかひろし
歌人大岡博

なみ ほに 裾洗はせて 大き月

ゆらりゆらりと遊ぶがごとし

の歌碑は、楽寿園に建立されました。昭和9年(1934)に短歌誌「菩提樹」を創刊、窪田空穂門下の重鎮として歌に生命を傾けました。教育者として活躍、県教職員組合委員長、初代県立児童会館長も務めました。「三島町歌」「三島市制施行祝賀行進曲」「三島夜曲」の作詞も知られています。

文化功労者・芸術院会員
詩人

おおおか まこと
大岡 信

詩人・批評家
昭和6年(1931)生まれ

大岡博・綾子の長男として誕生。三島市立南小学校から沼津中学(現、沼津東高校)へ進み、東京大学文学部国文科を卒業後、読売新聞社に入社。

学生時代から詩人として注目され、昭和30年(1955)『現代詩試論』を、翌年第一詩集『記憶と現在』を刊行。相沢かね子(沼津出身劇作家・深瀬サキ)と結婚。新聞社退社後は、明治大学教授に。

昭和54年(1979)から朝日新聞に『折々のうた』の連載を始め、そのコラムで菊池寛賞を受賞。読売文学賞、現代詩花椿賞ほか、昭和62年(1987)、『詩人・菅原道真』は芸術選奨文部大臣賞、フランス芸術文化勲章シュヴァリエ章に輝きました。当時日本ペンクラブ第11代会長に選ばれ、芹沢光治良、井上靖に次いで沼津中学出身者で3人も会長が選ばれたことが話題になりました。

平成になってから、フランス政府より芸術文化勲章オフィシエ受章、東京都文化賞、恩賜賞、日本芸術院賞、金冠賞(マケドニア)、朝日賞を受賞し、平成9年(1997)には文化功労者として顕彰されました。

た。東京芸術大学教授から客員教授に。

曾祖父を初代三島警察署長に持つこの偉大な詩人・批評家は、故郷三島の清澄な川と水を惜愛し、各種の地域活動に、超多忙の中をぬって積極的に参加しています。「故郷で語る折々のうた」、「三島ゆうすい会」その他、数えればキリがありません。その著書は既に300冊を越え、鋭利な視点による執筆活動は、ただ驚嘆するのみです。

あくたがわしょうまつか おおおかあきら
芥川賞作家の大岡玲

大岡信の長男で、平成2年(1990)『表層生活』で芥川賞を受賞。先に『黄金のストーム・シーディング』で三島賞を受賞しています。



平成13年(2001)3月31日発行の『三島アメリティ大百科』(発行・三島市)のP.160に大岡 信氏のコーナーがありますので、文章部分をご紹介します。